幼稚園から移行した認定こども園における乳児保育の課題

—A 認定こども園における領域「健康」を窓口にして—

栗岡あけみ・多田 琴子

The Problems in “Infant Care and Education” at Certified Centers for Early Childhood Education and Care Having Changed from Kindergarten : Through “Health” Practice at “A” Certified Center for Early Childhood Education and Care

Akemi Kurioka, Kinnko Tada

豊岡短期大学 論集

第 15 号 別冊

平成 31 年 3 月 31 日 発行

幼稚園から移行した認定こども園における乳児保育の課題
—A 認定こども園における領域「健康」を窓口にして—
The Problems in “Infant Care and Education” at Certified
Centers for Early Childhood Education and Care Having Changed
from Kindergarten : Through “Health” Practice at “A”
Certified Center for Early Childhood Education and Care

栗岡 あけみ 多田 琴子
Akemi Kurioka, Kinnko Tada

問題の所在と目的

平成 29 年（2017）3 月に新しい「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が告示された。同時に「幼稚園教育要領」・「保育所保育指針」が改定告示され、3 法令記載内容の整合性が図られた。幼保連携型認定こども園において、特に配慮すべき事項の充実が図られた。さらに、乳児期の保育内容として身体的・社会的・精神的発達の 3 視点からねらい内容が示された。満 1 歳以上満 3 歳未満児の保育は、満 3 歳以上の保育との連続性を考慮した 5 領域で示されている。これにより満 3 歳未満児保育（以下乳児保育とする）においては、情緒的絆の形成と健康・安全、生活の安定から発達を確保し、愛情豊かで応答的な関わりが必要である。と、方向性が明確になった。

乳児保育を担う、幼稚園から移行した幼保連携型認定こども園の乳児保育の現状は、どの園も手探り状態である。認定こども園での乳児保育の有り様が、今、問われている。

本研究の目的は、幼稚園から移行した A 認定こども園の乳児保育担当保育教諭に対して、改訂の基本事項を踏まえた、教育・保育の展開を意識する必要があるとともに、乳児保育に対する保育教諭の課題を明らかにすることにある。

研究の方法

【研究概要】

幼稚園から移行した認定 A こども園の乳児保育に着目し、担当保育教諭の認定こども園教育・保育

要領についての考えと乳児保育の課題についてインタビュー形式で質問を行う。インタビューは ICレコーダーを用いて記録し、記録されたインタビューを文字化したものを分析資料として用いた。

文字化された保育者のインタビュー内容から、今回は、領域「健康」を窓口として、乳児保育の課題について整理を行った。

【倫理的配慮】

インタビューはプライバシーに配慮して、名前などが特定されない方法で取り扱い、結果の分析などについては研究以外に使用しないことを口頭で説明して、了解を得たものである。

【調査対象の整理】

調査日：2017年10月23日、11月27日

調査対象クラス：未満児クラス（0・1・2歳児クラス）

保育形態：分担制（分業制）

調査対象園概要：H県K市私立認定Aこども園（以下 A園と表記する）

K市郊外部、自然あふれる森の中に位置する。キリスト教精神に基づき、適切な教育環境の下、自由な遊び時間を尊重しつつ、健康な生活、交わりの生活、探求する生活、表現する生活などの保育内容が調和的に編成されている。園庭は、3000㎡の広さがあり、その中には、ビオトープや樹齢90年程のモミの木やエノキ・クヌギ・ヤマモモ・イチョウなど約25種類の樹木があり、子ども達は一日中自然の中で豊かな遊びを体験している。

- ・2011年 幼稚園型認定こども園に移行(2歳児受け入れ開始)
- ・2015年 幼保連携型認定こども園の認可を受ける(0・1・2歳児受け入れ開始)
- ・2016年 K市地域子育て支援拠点事業「愛の光キッズ」が認可され立ちあがる。
- ・同年 4歳児、5歳児のみ保育料の無償化を実施する。

【分析概要の整理】

幼保連携型認定こども園教育・保育要領の第2章、第1、第2、第3章第2よりキーワードを整理し、①心身の健康な育ち ②運動機能の育ち ③基本的な生活習慣の育ちの3項目を第一カテゴリーとした。乳児保育を实践する保育教諭に、インタビューを行い、文字化した文章から、「第一カテゴリー」に含まれるキーワードの中で類似した内容を集め、グルーピングしたものを「第二カテゴリー」として分析表を作成した。

【インタビュー内容】

1. 幼稚園から認定こども園に移行したことで領域「健康」の保育内容について意識して実践していること、困っていること。
2. 最新幼保連携型認定こども園教育・保育要領における領域「健康」の窓口から以下の3視点から意識して実践していること、困っていること。
 - ①情緒の安定、心の安定について
 - ②伸び伸びと体を動かして遊ぶことについて
 - ③基本的な生活習慣や生活リズムを身につけることについて
3. 発達区分について、園庭について、担当制について考えていること。

表1 調査対象者の基礎データ

調査対象者 (★は子育て経験者)	幼稚園 経験年数	保育所 経験年数	認定こども園 経験年数
0歳児(3名)担任A氏★	9年	9年	3年8カ月
1歳児(12名)担任B氏	1年	0年	6年8カ月
1歳児サポートC氏★	4年	13年9カ月	1年8カ月
2歳児(18名)担任D氏★	0年	4年9カ月	9年5カ月
2歳児サポートE氏(男性)	0年	0年	8カ月
2歳児サポートF氏	0年	0年	8カ月

表2 第一カテゴリーのキーワード表

心身の健康な育ち
愛情豊か 生理的・心理的欲求を満たす 心地よく生活する 安定感 温かい見守り 応答的に関わる 温かい触れ合い 和やかな雰囲気 ゆったり 落ち着いた雰囲気
運動機能の育ち
一人一人の発育 十分に体を動かす はう 立つ 歩く 寝返り お座り はいはい つかまり立ち つたい歩き 遊びの中で体を動かす機会の確保 動かそうとする意欲が育つ 歩く 走る 跳ぶ 基本的な運動機能 上る 押す 引っ張る 全身を使う

基本的な生活習慣の育ち
個人差 様々な食品に慣れ 食べることを楽しむ 一人一人の生活のリズムの形成 安全な環境 午睡 おむつ交換 衣類の着脱 清潔になる心地よさ 食生活の形成 離乳食 食べる喜びを楽しみ 進んで食べようとする 食物アレルギー 学校医の 指示と協力 調理形態に慣れる 食事 間食 習慣が身につく 排泄に慣れ 排泄 ができる 食べる楽しさ 排尿間隔 便器に座る 生活に必要な基本的な習慣 家 庭との連携

表3 第二カテゴリーのキーワード表

心身の健康な育ち
<u>お母さんにもっとして欲しいと求めているといけない</u> <u>体調が急変した時責任が取れない</u> <u>看護みたいなことはできない</u> <u>余裕をもって躰をしてもらうのは難しい</u> <u>どこ</u> <u>までして良いのかわからない</u> <u>お母さんの大変さは想像でしか分からない</u> <u>園がど</u> <u>こまで担うのか難しい</u> チーム保育 信頼関係 愛着関係
運動機能の育ち
<u>大きいクラスの子どもの交流方法の難しさ</u> <u>邪魔ではないのか</u> 保育者同士のコ ミュニケーション 信頼関係での安全管理 声掛け 危険が無いように極力見守る 無理に止めない <u>ビオトープや大型遊具は少し怖い</u> 一人必ず付く 三輪車に乗る 足の力 体の力 こぐ力 風をきる気持ちよさ 衝突しない調整力 葛藤 順番に 乗る 子どもの距離感 手作り玉入れ <u>発達について保護者との共通理解</u>
基本的な生活習慣の育ち
シールを貼り気付かせる トイレを自分で選んで座る 手洗い 喜んで排泄ができ る 自分でやろうと思える経験 <u>どうすればバタバタせずに食事ができるのか</u> 一人一人の食事を大事に 個人差 生活習慣 排泄 気を付ける おしっこが出た らともに喜ぶ 無理をしない <u>トイレトレーニングの家庭との連携</u> 本人の意思を 大切に 保育者も一緒に 手を貸す 見守る 声掛け 丁寧に行く 自然と 周り の様子を見ながら動く 帰る前の話し合い <u>担当制 分担制</u> <u>保護者対応</u> 午睡 <u>への移行の難しさ</u> 保育者間の連携

【その他のインタビュー内容】

1. 発達過程の区分が無くなったことについて

- A氏：新しい教育・保育要領は、個人を大事にしている感じがしますが、次はこんな遊びを提案しようか、まだできないことに対して助けになることは無いかという振り返りの時には、以前のような資料（発達区分の表示）があった方がいいかな、と思うこともあります。①
- B氏：目安としては書かれている方がありがたかったものの、同時に遅れているかの目安にもなっている、という印象があって、こちらに変に気にしてしまうところがありました。(略) それぞれの子どものペースや進み具合に違いがあることを前提に、およその順番などがだいたいわかっていて、何歳までにできていなくてはいけないというふうに捉えがちだったものがなくなった方が、気持ちは楽になったように思います。② (略) 年齢別に型にはめて段階的に捉えない方が、子どもにとってもお母さんにとっても良いのではないかと思います。
- D氏：私はあった方がいいと思います。このぐらいの年齢であればここまでできることが望ましいという目安がある方が、日々の生活の中ではありがたいと思います。③ 以前は、参考にしてこのぐらいできるといいんだな、じゃあこんな保育を入れてみようというふうに見ていました。
- E氏：なくなったというのは聞きましたが、なくなった意図は何なのかということが分からなくて、やはりあった方がいいような気がします。
- F氏：あった方が目安となりますし、発達段階がわかりやすく、ここまでにはこれだけクリアしておけば良いということが分かりやすいのであった方がいいと思います。学生時代、実習で週案や日案を立てたときに参考に使っていたので、自分としてはあった方がありがたいです④

2. 園庭について

- A氏：外に出たときに、2人の興味が違い、居る場所が離れたので、目を離さないようにしました。他の先生が近くにいることを確認し、3名の保育教諭で連携しながら保育しています。⑤
- D氏：幼稚園児が使用する園庭のため、2歳児には広いと思います。⑥ 広いから体を使って遊ぶ、ガタガタのところを自分たちで工夫して三輪車を押ししたり、乗ったりするメリットがありますが、ビオトープや大型遊具はちょっと怖いな、というのはあります。

3. 担当制について

- D氏：担当制はいいと思います。⑦ きめ細かいフォローができるのは、担当制だと思います。でも経験はありません。
- E氏：担当制という言葉は知りませんでした。⑧ (説明を聞いた後) 私は、担当制ではなく、今の分業制がいいと思います。担当制にすると頼れる先生が一人になってしまいます。今のよう
に3人の先生が自分を思ってもらった方が気持ちもゆるみやすいと思います。担当制にする

と保育者側もこの子どもだけ見ておけばいいような感覚になりそうで、それは嫌です。⑨

F氏：私の友人の園は担当制が多いのですが、信頼関係や愛着がすぐにできて接しやすく、保育者側にも愛着がわいてくるからいいよ、という人が多いです。また、保護者対応も確実にできるので担当制もいいなと思います。⑩

分析結果と課題

表4 「実践していること」カテゴリー表

第一カテゴリー	第二カテゴリー
心身の健康な育ち	情緒の安定 チーム保育 愛着形成
運動機能の育ち	戸外遊び 発達年齢の違いへの対応 手作り玩具 保育者同士のコミュニケーション
基本的な生活習慣の育ち	保育者間の連携

表5 「困っていること」カテゴリー表

第一カテゴリー	第二カテゴリー
心身の健康な育ち	体調不良時の対応（幼稚園教育との違い）
運動機能の育ち	戸外遊びの安全確保 保護者との連携
基本的な生活習慣の育ち	食後から午睡への移行 家庭との連携 担当制と分担制

【分析から見えた課題】

1. 育ちを見極めるチェックリスト作成課題

担当保育教諭は、保育所勤務経験と子育て経験から、体験知により保育を展開しており、乳幼児の情緒の安定が図られていると推察できた。しかし、体験知による一人一人の子どもへの応答や関わりは、無意識的保育活動であり、その後の振り返りは、評価視点が設定されていない。

また、新幼保連携型認定こども園教育・保育要領に発達区分の明記が無くなったことについては、「あった方がいい①」「望ましいという目安がある方がありがたい③」とあるように、育ちの見極めが難しい状況であることが読み取れる。逆に「何歳までにできていなくてはいけないというふうに捉えがちだったものがなくなった方が、気持ちが楽になったように思います。②」と発達区分を意識しながら保育していたこともわかる。さらに「実習の時、週案や日案立案時に役立った④」とあるように、保育者養成校の学生は、実習で活用していたことも読み取れる。発達区分の明記有無にかかわらず、保育者は子ども一人一人を育てていく方向性を見通さなければならない。その方向性を見極めるために、日々の保育の振り返りを確実にを行うための評価視点を明記した「育ちを見極めるチェックリストの作成」を保育教諭集団で進めることが必要であるといえる。

2. 移行に伴う保育感覚の課題

移行前保育では、子どもが体調不良の場合、保護者に連絡をしてすぐに迎え要請を行っていたが、移行後の認定こども園では働く保護者の事情に考慮し、すぐに迎え要請ができないジレンマがある。

また、A氏は、0歳児3名の担当である。1歳児12名と同室で生活している。インタビュー内容⑤から1歳児担当の保育教諭2名との連携から安全性の確保の必要性を確信している様子がみられる。D氏の⑥からは、今の園庭は、2歳児には広いと自覚していることがわかる。これは、現在の園庭は、移行前の幼稚園において、3歳児以上が活用していた園庭（A園の概要にもあるように3000㎡の広さがあり、その中には、ピオトープが設置されているという環境）であるため、2歳児には広いと発言したことが読み取れる。

また、0、1歳児は、伝い歩きやようやく歩けるようになり活動範囲が広がり始める時期であり、対して、2歳児は、走ったり三輪車に乗ったりできる時期である。そのため、A氏とD氏の意識差は、運動発達の違いによる行動範囲の相違によるものと考えられる。

A園では、園庭を全園児で共有している。現在、未満児クラスも戸外遊びでは、準備ができた子どもから順番に外へ出る。A園の園庭は広大で目が行き届きにくく、発達の個人差が大きい乳児の場合の安全性の確保と保育教諭の安全管理意識に課題がある。

3. 指導計画に位置付けた職務システム化への課題

担当制については、インタビュー内容⑦や⑩のように、担当制の良さを理解している保育教諭は、その必要性を実感している。しかし、⑧⑨のように担当制の意味や方法を知らない保育教諭にとっては、取り組むには不安がうかがえることがわかる。

A園では分担制（複数担任で役割重複がないように保育する体制）を行っているが、全保育教諭が担当制の意義を理解したうえで、担当制（幼保連携型認定こども園解説書第1章第4節2）の導入を行い、安心・安全を十分に確保した一人担任制の3歳児保育への移行を2歳児後半より弾力的に行う

ことが求められる。

基本的な生活習慣の定着を図りたい昼食から午睡へ活動を移す時、複数の役割を保育教諭間の暗黙の了解で分担している。保育教諭間の協働性の高さは認められるが、役割を明確にし、システム化して指導計画に組み入れて実践していくことが必要である。

4. 保護者との相互理解の確立課題

新幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、子育て支援の充実が求められている。移行前の幼稚園において、早朝保育や預かり保育は、任意で行われ、全ての幼稚園が実施しているのではない。しかし、認定こども園に移行した園ではそれらが必須となる。特に、乳児保育では、子どもの生活が24時間のサイクルで営まれていることを、保護者と共有すると共に保護者に説明する自覚とその方法の確立が求められる。

謝辞

インタビューにご協力いただきました、認定Aこども園保育教諭の皆様へ感謝申し上げます。

参考文献

- 藤本大介・上田七生・樟本千里・若林紀乃・越中康治・松井剛太・長尾史英・山崎晃. (2011). 認定こども園への移行が保育者の保育観に及ぼした影響. *梅光学院大学論集*, **44**, 11-21
- 五十嵐淳子・北見由奈. (2014). 認定こども園への移行に伴う課題：保育現場の事例から. *白鷗大学教育学部論集*, **8(2)**, 333-347
- 文部科学省. (2018). *幼稚園教育要領解説*. フレーベル館
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省. (2018). *幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説*. フレーベル館
- 中塚勝俊・山本幾代・川原亜津美. (2017). 幼保連携型認定こども園への移行過程と課題. *高松大学・高松短期大学研究紀要*, **68**, 1-17
- 厚生労働省. (2018). *保育所保育指針解説*. フレーベル館